

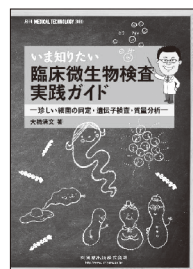
月刊 *Medical Technology* 別冊

いま知りたい

臨床微生物検査実践ガイド

—珍しい細菌の同定・遺伝子検査・質量分析—

大楠清文 著



臨床微生物検査の現場で実施される分離株同定において、その結果がどうあれ菌名が導かれると“ほっと”するのではないのでしょうか。同定とは「未知菌株の性状が既知菌種の性状と一致する、または限りなく近いことを表す」ことであり、その手法を選択決定し報告するのが検査担当者の責務となります。ゆえに、同定結果は担当者のものの考え方、技量に委ねられており、臨床医は何の疑いもなくそれを信じ治療に専念することになります。なんと重要なことであり、嬉しいことであり、おそろしいことではないのでしょうか。非発酵グラム陰性桿菌でデオシアニン産生が確認されれば、それだけで *Pseudomonas aeruginosa* と同定できます。ただし、どんな検査技術を駆使しても菌名を導くことのできない場合（変異株や新菌種、担当者の非熟意など）もあります。特に、過去に経験のない株に遭遇したら、困惑し同定の手立てを模索することになりますが、このような時に役立つ1冊が本書ではないのでしょうか。

本書は、筆者酷似の似顔絵コンシェルジュが案内役を務め、Chapter 1では珍しい細菌11菌種1グループ〈*Helicobacter cinaedi*, *Capnocytophaga canimorsus*, *Mycoplasma hominis*, *Corynebacterium kropfenstedtii*, *Neisseria meningitidis*, *Mycobacterium ulcerans*, *Clostridium tertium*, *Streptococcus gallolyticus*, *Campylobacter fetus* subsp. *fetus*, NVS (nutritionally variant streptococci), *Arcanobacterium haemolyticum*, *Bordetella holmesii*〉を取り上げ、実際の症例報告の概説、筆者による詳細な解説がふんだんに盛り込まれています。これらは拙い経験しかない私にも、懐かしさや苦悩がよみがえり、あらためて現代の同定手法がうらやましく感じました。なかでも *C. fetus* subsp. *fetus* については、わが国での感染が注目され始めた頃に経験し、室内天井の様子がすべてらせん菌に見えた記憶がよみがえってきました。Chapter 2では、遺伝子検査法の基本と実技がイラストや写真でわかりやすく紹介されて

います。1冊の小冊子でも足りない内容を18頁に凝縮して解説しているのは筆者ならではの技法であろうと感じました。Chapter 3では、以前から臨床血液化学分野で利用され、近年微生物同定にも応用されてきた質量分析法について、原理、操作、分析、同定の実際を紹介しています。この項の終わりの言葉では、「自動同定感受性機器、遺伝子増幅技術、質量分析法の三大技術革新はあくまでも感染症検査ツールにすぎず、これまでの三種の基本技術（鏡検・培養・感受性試験）は今後も大切であり、これらに磨きをかけることが重要」と結んでいます。まったく同感であり、最新技術に走りがちなのはやる気持ちに対し、基本技術の大切さを促してもらえたと感謝です。Extra chapterでは細菌分類学について、その成り立ちと考え方、学名の調べ方、菌名の正しい表現法、新種の提唱法などを理解してもらえるように記述しています。表裏一体である分類と同定が理解できてこそ検査実務を担うことができるのではないのでしょうか。Appendixには、代表的細菌のプライマー情報一覧、そしておもな細菌の新旧名称一覧が付記されており、多くの文献をひも解く労力を省いてもらえるありがたいコーナーとなっていました。さらに、挿入コラム「臨床微生物検査のプロフェッショナルになるための7つの心得」には筆者の心からの訴えがにじんでいましたが、内容は本書を買い求め、お読みいただいてからのお楽しみとします。

感染症治療でもっとも大切なことは、病める患者さん中心の医療を念頭におくことであり、本書はこれを支える臨床微生物検査従事者にとっての高価値アイテムとなるでしょう。検査現場の皆様はもとより、教育施設の教師、学生の皆様にもぜひ手にしてもらいたい1冊であります。

(株式会社エスアールエル、株式会社ミロクメディカルラボラトリー 山中喜代治)
<B5判/164頁/定価3,570円(本体3,400円+税5%)/
医歯薬出版/2013>